

除夜の作

高

適

旅館の寒燈ひとり眠らず

客心何事ぞ 転悽然

故郷今夜千里を思ふ

霜鬢明朝又一年

【作者】高適

(七〇二?〜七六五) 盛唐の詩人、字は達夫(たつぶ) また仲武(ちゆうぶ)、山東省滨州(ひんしゅう)の人。若

い頃不遇で貧しく、七四四年杜甫、李白と相識り、年五十歳ごろから詩を作りはじめた。辺塞詩人として有名。豪壮にして節義を重んじた性格を反映して、詩にも気骨があり重厚である。「高常侍集(こうじょうじようじしゅう)」十巻がある。

【語釈】

*除夜：大晦日の夜である 一説によると七〇五年作者四十九歳の除夜である

*客心：旅人の心情 *客情：ここでは作者の心をいう *何事：なぜ どうして

*悽然：寂しく悲しいこと *霜鬢：霜がおりたように白髪のおえた鬢(びん)

*思千里：この主語に二説ある (故郷の人々が)千里のかなたにいる私を思う (私が)千里も離れたところから故郷を思う

【通釈】

旅館の寒々としたともしびのもと、私はひとり眠られぬ夜をすごしている。旅人の心はどうしてこのように、いつそう寂しさを感じるのだろうか。故郷の家族の者達は、きつと大晦日の今夜遠く旅をしている私のことを、思ってくれているだろう。明日の朝(元旦)になれば、また、この白い鬢面のわが身は、また一つ年齢を加えなければならないのだ。